

「前立腺癌の画像診断」

—司会の言葉—

藤澤 正人¹, 布施 秀樹²

¹神戸大学医学部, ²富山大学医学部

画像診断法の進歩は、泌尿器科のさまざまな疾患に対する診断と治療において大きな変化をもたらしている。侵襲のある診断法からより低侵襲な方法が望まれるなか、現在までに多くの画像診断法が開発され、臨床にも応用されてきている。画像診断では、その疾患の局在、ならびに病巣の広がりを知るとともに最近ではその性質にいたるまでの情報が得られるようになってきた。また、手術の上で必要な多くの情報を術前に得ることができ、そのアプローチ法の選択にも役立っている。このような画像診断で最も重要なのは得られる情報がどれぐらい信頼性があり正確であるかという点である。そのためには、それぞれの画像診断法の特徴を把握し、疾患に応じて使い分ける必要がある。

今回、前立腺癌における診断あるいは治療に有用と考えられる画像診断法として PET, MRI, CT, 骨シンチグラフィを取り上げ個々の病巣におけるその画

像診断法の長所、短所を見極めるとともに、その限界について討論した。

楫先生には、前立腺癌の病期診断における MRI の有用性、ならびに MR spectroscopy による性状ならびに局在診断についての現状と課題について述べて頂いた。一方、大山先生には、¹¹C-acetate を利用した PET 診断をいかに前立腺癌の診断に用いるかについて述べて頂いた。討論においては、癌の局在、病期診断、骨やリンパ節などの転移巣に焦点を絞り、それぞれの立場で意見を述べて頂き、非常に有意義な情報を数多く得ることができた。

今後さらなる画像診断法の発達、われわれ泌尿器科医が多くの情報をもたらす疾患の治療において大いなる貢献が期待できると考えられた。

(Received on March 13, 2006)
(Accepted on March 20, 2006)